和漢文撰

詩類　歌類

辭類

文
191
二

ハ 5
686
2

東京芝區三田二丁目百拾貳番地
坪内雄藏藏書

明治三十六年十一月五日
坪内雄藏氏寄贈

高氏寄贈

門 ヘ 利
號 686
卷 之

和漢文操卷之二

○詩類 附序

△大和真名詩序 並賛

東華坊

頃日撰分獅子庵之文庫迚點検燈花詩叢了則從歌行詞曲之題類雜五言七言之律詩而大槩有二百余首乘手志者從延寶之中比及貞享之末迄十餘年之草稿也其詩也爲学子太白之

686
2

風情ヲ字ニ杜子美カ之風姿ヲ止手字ニ之而思ヘ之則心知而不口慳ハ有從音訓之違決而知難学物了矣於茲從元祿之始思立大和之詩而製假名與真名之二様了則假名之詩有從五七之句法殆爲似和歌了其語路之拍子有謂渓士之詩矣于然謂真名之詩有協音韻之調平仄些蜂腰鶴膝之掟迄一麼不背渓家之詩法交以音訓之通路視之時ハ有渓字也共聽之時有和文也乘尤在

其有故翁之所謂事大和有從中昔之風俗有狂歌有狂詩而以下如夫有千金是有病氣秀句與口相之雑話爲名附詩共歌共乘尤有有一座之酒興而謂猿樂人之輕口矣文章有例有姿情之二而姿情有先後事有從本詩歌之骨法也則言語之面通味有可口傳了共姿情之枯面有不心知與所我今傳居其間之糸節而同以風雅不認於諸越別以比興不狂于大和實麼思被嗔我

朝之詩而特有雅俗通用之一格事歷
乍左有和漢語之音韻而爲用俗語之
續了則仰通昔之狂詩而不道散法之
羅止所詮者爲蹈詩之六義些尋韻瑞
活法之古語而用二字之字之韻礎居
據說文韻會之正義而調五言七言之
和訓乎者何迚可成數醫者之狂詩成
表見師之狂歌矣耶爰見羅山之七字
城了則其言取漢語以詠我朝之事而
此可爲胥彼可爲節與者一言万當之

凡例而謂爲畫大和真名之要矣学
彼人者可恐此不恐此人者不学彼了
增而謂大昔之風俗則比物風人乎麼
爲先教誡之情而爲後文章之姿了則
范鳥之優游不者爲厭樣也共畫實情
之餘迚加階助語副止手古之情者隨
天理居今之情者噬人理歷爾有則温
情之故而知姿之新了哉漸從李唐之
詩人增而至趙宋之作者則詩不者除
助韵之字而五七之間不費言葉見習

其身其侭之名人而巧一字一言之妙
歟含無量之情芸似童部之屈言傳而
有聞人麼推量之術汰也乎實夫我朝
者手不波国也則傚詩經之麟之皇矣
而可用乎哉乎也之詞皐矣歌行之類
者分論之事也其内音韻與平仄之事
者不知所用之道理共暫不背古法耳
也則假令遇兩韻之字時者可分論用
兩韻矣手從本見為得詩聖之名杜律
之五言七言了則平仄之不合麼有多

不者向不知者而論不知事則夜麼用
麼摸象之費也乎熟思風雅之変則詩
者成騒騒者成辞而分者成詩歌與連
俳了則和漢有面々之物數奇而諫人
宛感我宛從詞遣之虚實例知淋數去
與面通去則詩者唯遊志之行處而不
知知言語之無用乎左者云些此詩之
易学而黄白之紡麼稽有多則世更成
狂詩之思而不田千畑学文之人者成
巴人薤露之和共向風而歟之則不堪

于白雪之詠乎誠恐而可学誠学而可
思者唯是此詩之風姿也則風情者今
之不及言葉于時元禄乙亥冬神無月
十二日試製真名之詩而賛故羽之屋
像者爾也

其賛　　東苍坊

此翁昔在武陵城　野分芭蕉似雨鳴
蘭省得時櫻繫馬　庐山捨世竹棲鶯
歌羞西上人陪渡　詩傚杜工部写情

和漢文章誰可敵　假名不必隔真名

○評云此詩八嫌厭ノ法ヲ以テ和漢両用ノ作ヒ云ハン捧スルニ
一二ノ起句ハ祖翁嘗テ武江ニ通テ芭蕉野分シテ芭蕉庵
盥ニ雨ヲ聞夜哉ト其世三郷音メル發句ニテ芭蕉菴
ノ名モ此時ヨリトヤ然ハ前對ハ一世ノ栄辱ナトヲ白氏
文集ノ詩勢ヲ假リ後對ハ一生ノ風雅ニシテ常ニ西行
ノ山家集ト杜律ノ五言ヲ持アルキ結ル信古ノ実情
ヲ顕セルナリ此故ニ七八ノ結語ハ假名ト真名トノ通用ヲ
称シテ遠ハ祖翁ノ遺命ヲ傳ヘ近ハ我師ノ本懐ヲ遂シトナリ

賛雪中ノ柳ニ

此繽使人思古詩　梅花未識竹先知

知ルト與ヘ不ルト識ラ孰カ愈カリ　柳ハ乍ラ氷ヘ凝ル彼ル雪ヲ摧カ

○評ニ云ル此詩ハ豎詔ノ格ニシテ法ニ換骨ノ絶妙ト称セン去レハ
蓋山ト夜雪ノ句ヲ假リテ覚ノ字ヲ識ノ字ニ換タルハ例ノ
膠句ヲ思ヒ出時ニ詔路ノ拍子ヲ調ヘ序ヲ増テ熟愈
ト八論語ニ知ノ子ノ哉入リ然ハ梅行ノ知ラ知ヨリ
柳ハ知ナカラ雪ニ推レ居ル人ニ利鈍ノ用ヲ知トミヤ詩ハ
誠ニ此等ノ訓諫ヨリ孔子モ常ニ勸玉リ　此繽ハ濃ノ
野航亭ニ在リテ祖翁ノ作繽ト同ク十襲ス柳雪堂
ノ標号モ此時ノ称ナリトヲ

詠ス懸ル松蘿ヲ

何ソ不ス朝顔ノ知ラ我秋ヲ　松憑ニ千歳ヲ幾程ノ秋ヲ

凋時可ル恥ル袍王意ニ　莫恨不知白露秋ヲ

○評ニ云ル此詩ハ乙韻一協ニシテ詩意ハ註スル袍王袍女
カ四跡ハ嗟歎ノ袍王寺ニ在リ發心ノ歌ニ朔出ルモ
拈ルヽモ同シ野追ノ草何ヲ秋ニ交ル八ヲ果キト誦シ
テ佛御前ヲモ恨ストヲ然ハ此詩ノ乙韻ハ其歌ノ意
摘テ秋ノ字ヲ運ルナリ首句ト落句トニ不知ノ二字ハ
連俳ニ云ル同字異訓ニシテ此等ヲ和詩ノ凡例ト知ルヘシ
不知モ莫恨モ万葉ノ熟詞ナリ

戯ル俄道心ニ

四十八枚ノ頼

終ニ成ル紙子坊ト

興風憎若繁　毎物遺淺黄
肩些有伊達　心曽無化粧
宛尊初雪旦　立不恥梅香

○評云此詩ハ全ク大和ニシテ四十八願ノ仏語ヲ假テ紙ノ縁語ニ結ベルハ蔵ノ字ノ諧謔ト知ベシ按スルニ此法師ハ歌舞ノ遊興ニ千金ヲ尽シテ若道心ト成レルニヤ若繁ノ二字ハ其所縁ト関立此故ニ七八ノ結句ハ初雪ノ風次ヨリ梅香風情ヲ含ル一篇ノ風雅ハ此二句ニ在リテ立而不恥者其由也興ト云ル論語ノ詞ヲ裁入ベル談笑ノ虚実ハ変ニシテ文ニ摘採ノ絶妙ト称スベシ増テ梅香ハ紙子ノ臭ニ敵シテ一篇ノ起結ト知キヤ誠ニ真名ノ詩鑑ト云ベシ

頃日従二竹丈人一祝二七夕之節供一而被贈二菓紙一束一爰謝二毎歳之恩一而弥寄二四情一而已

一束ノ荷恩何若軽　思君四百八十情
誰知小菓戦於荻　音信不誇文月名

○評云此詩ハ大和風躰ナカラ論セハ連歌ノ優情ト云ハン十帖ノ絹ヲ故々ニ分ケテ四百八十ノ恩情ヲ荷フトハ誠ニ微意ヲ尽セリト云シ然ルニ二十ノ字ヲ時澤切ニシテ春風ニ百九十橋トモ南朝四百八十寺トモ其類ヲ長安ノ語音トカ註スト我朝ノ人ハ語音ニ通セス何ノ道理トハ知ラモ古法ニ任スルハ例ノ故実ナリ去ハ二四ノ結文ニハ全ク和歌ノ詞ヲ摘テ

定家卿ノ神無月ヨリ紙ニ文月ノ名ヲ寄セタル萩ノ音信モ和歌ノ句類ニテ此等ニ和漢ノ通用ヲ称スレ但シ山菊ハ枝類ニテ義農ニ封絆ノ名産ヨリ二竹ハ戸田家ノ武士ニ濃ノ岩崎ニ嘉通セリ先師ニ膠漆ノ仲友トヲ称スル今ノ山菊ノ詩ト俄通心トノ詩躰ハ大和ニ連俳ノ二様ヲ尽シテ此等ヲ真名ノ詩鑑ト云ハン然レハ祖翁ノ恐レ玉ハル狂詩狂歌ノ雅ヲ通レテ多ニ雅俗ノ當用ヲ知キナリ

右此五首ハ古え録之新製而燈花詩叢之附録也尤有庫再撰文撰而為大和真名之濫觴ト後人宜敷可勘案也

真名詩類　雑題

和栗山氏詩　林道春

有雄之又有雌之　此氣浩然左匝言
雖古神代春来者　東風吹寄自天原

○評云此詩八雲集ニ在テ殊ニ我神ノ始ヲ云レハ多ニ真名ノ詩ノ首尾トセリ然ルニ詩ト歌トハ詩路ノ拍子ニ卿遠アリテ俳語ヲ用レト漢詩ト成リ漢語ヲ用ユレト俳詩ト成レハ此等ニ後君ノ評ヲ待テ詮ル所ハ狂詩ト俳詩トニ一歩千里ノ好雪ヲ知レトナリ扶スルニ言語拍子ハ本ヨリ俳諧ノ自用ニシテ和歌ニ五七ノ出ヲ知ナヲ俳諧

二四六ノ文法ヲ立ルハ例ニ一類ノ意地ト知レ難シハ詩ト云イ文ト云イ五七ト四六トノ拘ヲ知ラハ和歌ノ優情モ俳諧ノ平話モ雅俗ハ言々ニ知ヘキナリ

賛秋風像　蓮二房

世傳ノ此老翁　越路恨秋風
今見何雖面　松残夕日紅

○評云此繪ハ松ノ木陰ニ老僧ノ杖ヲ携テ雲ニ夕日ノ残照ヲ詠スル躰ナリ去ルハ芭蕉先翁ノ越路ノ行脚ニ赤々ト日ハ雖面モ秋風ト詠セレ旅行ノ愁情ヲ引替テ今見レハ景色ノ面白ヲト轉シテ参ルモ作者ノ活法ナリ此等ニ意地ノ知キニ其繪ハ越中ノ倚夏亭ニ在テ知ニ有家珍トセリ

戯ル影法師ニ　水陳人

木ノ端影法師　蓋取ル夜寒ノ姿ヲ
絶ル霞ニ既整ル間ヲ　無当非ス玉ノ巵ニ

○評云此詩ハ例ノ諧謔ナカラ徒然ノ意ヲ摘テ今ノ法師ノ無風雅ヲ訊諫セレニ身ヲ木端ニ捨果テ月花ヲ雪霞セハ玉巵モ當ナキ心地ヲト全篇ニ月ヲ含メル隠見ノ法ヲ見ヘキナリ結句ハ木端ノ繋ニテ玉巵モ無當雖室非用ニトニヲ文選ノ詞ヲ採レル非字ノ影畧ヲ互見スレ共トモ當字ニ平仄ノ論ハ例ノ兩韻ニ任スヘキナリ作者ハ尾陽ノ素水ニテ水陳人ハ標号ナリトソ

謝祢茄子作有八瑟庵記二名録アリ　土方豎

含露鬚蕤竈鮮　更思繁所縁
我鄉何爲陋　月瘦不蟬蜎

賛鳥羽繪之蒲萄吸　渡白狂

筆吸蒲萄何国僧　足如竈馬口如蛙
盜時有好威童部　夕遇栽園可振痍

仇園八洛人金暇筆ナリト詩ハ諛諧ニシテ註ニ及ハス其繪ハ
濃ノ六之亭ニ在リ但栽園ニ百余ヲ移テ高卧郎ハ自称ナリト

△假名用ル真名韻序　並詩　康安通

我聞諸越之人有作詩了共不能仇国之歌大和之人有謳歌了共不能彼邦之詩假令詞有音訓之違麼情者何迚隔和漢矣聞則高麗人麼馬大和歌而誦我唐国之妻所愈敷琉球人麼遊筑紫而詠和歌赤角関之夕皆泉矣皆只爲風雅之通情厚哉扨社所角彼邦之詩經百通秋朝之万葉集居唐詩之

風有焉似古今集與哉詩有本通和漢之志了則也今有六歳之先世平濃東有挑花老仙而奈何捨我国之易讀假名而学他邦之難知真名耶迎新製平假名之詩而今畫溪家之詩法有誠謂本朝之文鑑有矣於茲不恥我拙頃日送蓮老師之帰義濃迎為假名之詩用真名之韻止乎老師称其詩曰先師首有奈猫文而斯所所交和漢之韻今也以此詩之格可謂万葉之韻與所誠哉

如放之文之箭而獲八百之鳥率夫不謂徼倖乎耶仍以爾云

松ゝおのゝ秋の霜さえ　播
はれあふ日ふる雨　交
享保甲辰の歳且て例の詩とあつち　菜
を風て万葉の韻とて一冊の接和
つゝて国君と祝て　廉安道

古ひとれ　ゝと独ゝ　著
我ゝ心ゝ　足　ゝ　茨
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　獅

おもしく万葉歌をもて反歌の意とするむ　毛物子

天津雲もとゝ雲やおかん　我はつりて此弟を生ふるき　解

菓のそやは此花はちくん　蘭　双のあれ此をとゝ川ゝ　蟹

○評云右此二首八万葉韻ノ濫觴ニシテ或八音ヲ用イ或八訓ヲ用ユ去ハ其書ニ跋涉シテ多八古例ニ據ルヤ学フ人八例ノ狂簡ヲ恐キナリ作者八賀ノ金城ニ住シテ庵熊ヲ姓トシ安道ヲ名トス本ヨリ詩騷ノ逸人ナリトソ毛物子八橋姓ニシテ俳名ヲ侶鵲ト云フ金城ニ数奇ノ名ヲ称シテ編行官家ノ人々モ交トシ学ヒストヲ埴嘗テ先師ト虚実ヲ論シテ書通ノ遊敵ナリトソ

享保甲辰の夏ちんかの万葉の詩とひろそ猶

キ〳〵二字韻の熟語あつし柳子庵ノ例の遊戯

とをやゝ下葉の花はなをく思題と

はくりてはしそ二字韻の詩と製さ

田家憩　蓮二房

はちとゝあの名はいとゝ花かつのりやよ　露濃　俗中

清香あるぬ清のかさく　歟副　徒のふはたをさきつ　慙通

○評云此体モ万葉ノ韻ニ似タレト多八訓ニシテ音八稀

ナラン然ハ此格ノ要スル所八和漢ニ字ノ熟語ヲ尋テ

私ノ韻礎ヲ作ルトヲス狂ト不狂トハ此堺ナリ按スルニ露濃

ト八雅俗通用ノ平話ニテコイヒケヒ例ノ通語ナリ俗中

ノ二字八日本紀ニ出テ歟副八万葉ニ在リ慙通八真名

伊勢物語ニカハレルカハレト八例ノ異語ナリ怨ハ浅香ノ花カハラシト詠シ影副所見山井乃ト詠メル総テハ古歌ノ載入ニテ此等ヲ二字韻ノ鏡ニ見ルヘシ去レト固思ヒ定ル所ニ俗習ニ用イ来レル故実ノ詞ハ論ニ及ハス但ハ自己ノ作ト云フ所或ハ古文ノ例ニ效イ或ハ文字ノ実ニ據リ或ハ字訓ノ郷音ヲ假ラハ却テ奇絶ノ作モ有ヘキナリ其等ノ設ハ大和詞ニ見ルヘシ

こゝにみ月のはつ花の蓮仏ゝ真名ハ二字訓もあれとも悪の一事とおもひ侘ぬるを思ひ出て

怨七夕ヲ恋ス意　　席安道

こゝに浅香の花　浅猿
人の恨のふかきあひ　某葉
○評云此詩ハ恨意ナカラ逢不逢意トヤ云ハン誠恋情ノ的白ナル此等ヲ俳諧ノ微中ト賛シテ和歌ニモ尽サル所ト称スレ按スルニ浅猿ハ例ノ假訓ニ意ヲ運ヒテ此類ヲ大和ノ古文トスイ虚言ハ常語ニテ論ニ及ス然ニ某葉ト俳諧ハ全ク作者ノ働ニシテ某葉ハ根葉ハ例ノ俗習ヨリ況ヤ俳諧ノ古語ヲ假ラテ物ヲ深ノ実ニ據ル字訓ノ郷音モ文字ノ実モ此等ヲ自作ノ絶妙ト称スヘシ

右今ヤ又首ヲ文楊ノ新制表ノ二句ハ也前ノ五首と下ノ葉ノ韻とヒ後ノ二首と二字韻とノ異意ハ来韻ノ要ヲ以て作レ不作レ向ヲ作レ

老圃ノ詞　岸眠襄

秋とかくしと人のいろうし　可聞
腰ふくみちひさきし　来品
露まぶれて笠のあけくれ　旭曈
おさまれる世ま留めるてふ　而云

祝フ二卅ノ餅ヲ　桐花角

いそ筆をおもるとよみし　廉
蓬をふくの餅にふれと　鹽
名も露みしろよをそてむ　劍
けふむよりとそれつぐあられ　蒹

○評ニ云此詩モ万葉ノ躰ナカラ称スル所ハ三四ノ面通味ナラン哉ニ草餅ノ撮タルヲ掌ノ振ニ喩ヘ芋頭ノ蹲タルヲ鶉ノ形ニ喩フ

ある八俳諧ノ敍容ナリ況ヤ花ヨリ團子トハ俚諺ノ俗語ナルナリ然ルヲ才ニ韵ノ鹽字ニハ假名遣ノ論アルヘシ庵ト伝額トス撥ル字ハ總テホノ字ヲ用タルト故実ニソ道理ナキ故ニ我朝ノ字書ヲ見レハヘレホモヘレヲモ假名附アリ惣シテ假名遣ト云フ事ハ定家卿ヨリ後ノ沙汰ナリトヤ道理ノ知レヌ事多シ然レハ兩韵ノ序謡ノ如ク其ハ字ニ其理ノ明ナラヌ文ハ時宜ニ随テ用ヘキニヤ例ノ勘察スヘシ作者ハ三方樣ノ名證ニ名アリ

喜ブ二七夕ノ晴一ヲ　池二川

今宵ハ雲も風もうれて　ささらさへ梔の色まもちしろ
世こちらきりはよしもとくも　年のあふやのあしみちるさき

まつるかを　ちかふ詞のほとゝある　ちかふ詞のほとゝある
我しれるひの衣かゝさき　いきとをれぬゆけをしられ

○評云　此詩モ律法ノ新制ニシテ例ノ大和ノ格トヤ云ハン
一三八昌ト櫃トヲ以テ渓三前對ノ法ナカラ中間ノ二對ニハ
文字ヲ對セス蔵甫和渓ノ四字ヲ以テ姓名ヲ意對
ノ絶妙ト称スヘシ但ヤ假名ニ真名ヲ附ルハ催馬樂
ノ古制ニナリ作者ハ越中ノ富山ニ住ス池田氏ノ家士ニソ
先師ト北蘭ノ友ナリトフ

假名詩類　雜題

羅好法師賛　　素花仙

双ひらの蝶ちるさくら　和れてはかなきはかなさを
あふ郭公もとゝ逢ひかりつゝ　本書は月に被ちらむ
菖蒲の一言に作直をこそ　もつのはなに成忠はきて
本事は芸名を切ものや　はれく艸の種をとめる

柳後園　馬支人
詩歌時ノ狂名ナリ

柳の面ぬ　おりそれてを　ちらんかるるをやら
むのはくるもむのちるはも　はなをの雪をはるをや

愛ス牡丹ヲ　作者ハ枚子頌ニ名録アリ　仔東恕

牡丹ノ餘花ハ春ノ末ニ咲ク雪ノ如ク白キ花ハ
我ガ心ノ中ノ花ハ冬ノ末ニ咲ク

詠梅

高尤把

梅ノ
花ハ
雪ノ如
園ニ
雪ニ

えひらけ　みんなうつくしえて
ほころそ　まさきなるう
あやなし　きれいなるむ
雪とかくる　あらはるめるれ

仏詩ハ唐ノ李太白カ五七言ニ效ナカラ和ト漢トニ
音訓ノ差別ヨリ句ノ配リ違ヒヲ見テ作者ハ
高田氏ミレテ尾城下ノ逸人ナリ

擬古

作者父基序ニ
姓氏アリ

張舞角

松ヲ行ク人ハ大路ヲ行ケ　如ニ一ツアル此ノ月ヲ
孔ヲ非代ノ人ニ　餘ノ人ニ　ちりぬるを

筆

仏詩ハ唐ノ李白カ假名ヲ假ワテ
都金ト時雨トノ二字ニ對ス
大和ニ對類ノ格ト云ヘシ

岸昨蓑

ちりぬるを　みなとなるあるを　いたるあ
いろはにほへと　ものかくるそ　ほとはる
ちりぬるを　ものかくるそ　けふ
わかよたれそ　ものかくるそ　ものかくるそ
つねならむ　ものかくるそ　いくく遊女の
うゐのおくやま　ものかくるそ　遊女の

嘆小傾城 作者八文鑑ニ姓氏アリテ黄山下ノ隠士ナリ 渡右範

[illegible]

對花感老 作者八越ノ安居寺ヲ辞シテ其藩ニ三品道ヲ南居ヲ柳明菴ト云リ 僧音吹

[illegible]

民詞 作者八文鑑ニ名録アリ獅子内ノ親族ナリ 各東羽

[illegible]

[illegible]

竿 擬古詩 渡白狂

[illegible]竹と一面の[illegible]

[illegible]竹[illegible]

○詩ニ云ル所ハ一字ニ韻ノ格ナカラ梅ト竹トヲ四句ニ配リメル八古詩躰ト云キナリ本ヨリ一字ニ韻八漢家ニ多ケト和訓ニハ語路ノ分ケ難キヲ疑辞ト云ヘ嘆辞ト云ヘ口合ノミ別ノ[illegible]ヤノ字ヲ用ヒメル例ニ大和ノ新製ト云ハヒ先ヒハ篇ノ詩ニ前ハ竿ニ梅ノ古語ヲ假テ竿

ノ一字ヲ含ム格ニハ隱見ノ絶妙ト称スベキナリ

師走朝寢　仙里紅

冬ヒ枯柿の葉ハ色ヒ枯ヘ　ヒトヒラ須臾ニ枯ヘ　ヒトヒラ

園ヨリ梅の枝し折れ　如ヒトヒラ川ヨリ漕ぐる

○俳ニ云ク詩ハ黄鸝園ノ歳莫春ニテ賦シノ典躰ナカラ梅ニ

ハ晴部ノ古歌ヲ摘ミ白川院船ノ俚語ヲ採テ誠ニ俳諧ノ

滑利ト称セン作者ハ柳ノ下ノ千折ニシテ摺木蔵ニ名録アリ

松茸狩　松丁牧

秋の財角北くあるるる　渡波のいく物ぞ

ひくに傘北柄とさ　ひくに傘北柄とさ

ちし仲国ヲ奥やもち　ちて霊ヒ久しもちて

遊路の時し汐をひや　色やちり紅葉とて

○詩ニ云ク詩ハ金ヲ賦躰ナカラ後對ハ例ノ寓言ニ似タリト

渡波ニハ仲国ヲ中賢ヲ喫出セル様ヲ示シ貫特ニハ

霊ヒ久ヲ松厳ヲ慰シ乱舞ヲ含ム然レハ西行ノ歌ヲ

起句ト成シ樂天ヲ詩ヲ結句ト成セル和漢ノ操ハ更ニ

シテ總テハ採文ノ絶妙ト称スベシ作者ハ尾城武門ニシテ

近松ノ氏トシ茂矩ヲ名トス其祖ハ義農ノ山縣ニ産シテ

北野天神ノ氏子ナリト今ハ寛法家ヲ練五臺ハ称号ナリ

戯花　作者ハ能登ノ七尾ニ住ス　岩長羽

岩城氏ノ優人ニシテ司鯔ト　從ヒテノ名ナリトソ

だにも和もれぬるそらに秋のゆくえ　いさ白雲の行方にぞ思ふ

雲の中に月を踏ぬと

公立　作者八冊羽氏ノ風人ニシテ　冊以之

尾城下ニ放遊セリ

蓮の葉の公立と言ひてよりもとの名残流よりとれて

おくるとぞ宵の月　もの思ふ西とぞ

鏡岩詠四季　林有琴

ゆく末をかぎりなき　四季もかぎりなく

長い春の日　夏の日　秋の夜　冬の日

鷺の影　鷺の影　秋のくれ　そもそもいつの世の人

○評云此詩ハ全ク歸体ニシテ四季三面詠ノ分明ナル誠ニ風景四絶

トニハン但シ鏡ヲ鏡岩トハ客語ニ似テ御談ヲ其岩ハ義懷ニ

名高キ稲葉山ノ北面ニ隆目ニテ例ノ長良川ハ東西ニ横フ櫻ニ

蛍ノ花和ナル庵ト鷺ト物淋シキ国ニ無双ノ名蹤ト云ヘシ

然ハ此詩ノ評スル処ハ二鏡風流ヨリ四季モ長良ト詞ヲ繋キ

国ニ美之名ノ名ヲ並ヘテ結句ニ諧語ヲ用ヒル半ヲ成俳詩

ト称スベシ作者ハ今ノ長良ニ住ス泊枕名人ノ長男カミノ林氏優人

詠蓮　作者ハ越中ノ城ケ端ニ産　其風子

ミテ市中ノ隠者ト称セリ

どこ仏のお顔くもくれ　まこの春の袍衣よ

拙句の孫北靈とあるとも　我いはぬ梅とあるかりあるとも

梅嫌　作者自ハ園論ニ名録アリ　嫌ハ戾ニテ和訓ノ俗習トソ　岸倚度

鶯はなほらくなるあるもし　学ばんとのたとあくむしてく

梅のはなとあふのとうとや　我りとも北堂梅ありとと

悼ム北国公ヲ　蓮二房

越のたちの風ふきたれるね　立とあくれのうとうとの

月の人郭のれて永あるは　見やおはせ行ありあるむ

武士業ものら梅と吟して　文を頼政のなてはあるる

ちよはるるちとあれて　我しりてよるとうとうとて

○評云此詩ハ風姿アリ風情アリ和漢ニ通用ノ錦トヤ云シ

去ハ前對ハ北ト行ト其地ハ竹林ニ河ヤラ廻ルテ屋敷ヲハ

北国館ト云イ茶屋ヲハ此君菴ト云フ其館ノ名勝ヨリ

トソ後對ハ文武ノ称ニシテ其名ノ風流ヲ添ヤラウ花ノ咲ル

トハ本歌ニ敵シテ誠ニ轉ノ絶妙ト称スレ況ヤ七八結語

ニハ冥途身ノ名ニ寄セテ同ジ道ニト意ニ暴ル近ク朋友

ノ信ヲ尽シテ遠ク生死ノ道ヲ忘レスト云シ此公ハ金城ノ

駒万子ヨリ終栗ノ記ノ亀掌ノ註ニ見スレ

晩望　作者ハ岡氏ニシテ信ノ善光寺住メリ獅子ヶ三書通ノ俳士ナリトソ　岩未格

山なるおれ打くる霧ちとり　孤村の月のゆるりと深し

[illegible]

松讃　仕松八賀ノ金城ニ在リテ作有　豆田氏ナリトソ錦文評ニ見ユ　豆風曲

代くゝ此幸世くゝの[illegible]　こゝ[illegible]ちる　れ[illegible]ろ
雪とゝのく後此新　雨[illegible]る　[illegible]此蓑
風をつる梢あり　[illegible]む　[illegible]
むらゝ[illegible]のこ　[illegible]

葡花　水陳人

[illegible]此[illegible]ゝ[illegible]ゝく　角[illegible]

[illegible]此[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

業平屏風賛　[illegible]前ノ屏風ニ　東帯ノ像ナリ　老花仙

むし[illegible]　[illegible]
あゝ[illegible]　むゝ[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]

侍砧意　作有羽ノ鶴図ニ住ス澤沢氏ノ　沢嵐七
優人ニシテ吾仲尤角下書通ノ友ナリ
[illegible]　[illegible]

一ツ屋とも宿とも詠ぶ　水の面に指とかれてや

寄餞意　　松丁牧

何と枠とも知れぬ　とも有いのと此名を詠よ
まさき孫の前此かなれ　作者ノ兩名八橋餞詠ニアリ　陳素六

挑灯ノ吟　此詩ハ京師ノ作ナリトフ

世と共らくく猿に言られて　月のあるつきに屋根を拵れ
夏月の宵のくるれば　時ならぬ雨に成けるたくく

鉢の水の氷りたるや　いつら蹄あげ此流をあゆる

四季詠　作者八長野氏ニシテ越ノ新潟ニ住ス長蹬寺佛力家ヨリ　長北柱

我為起とおもふてさうめれば　明るゝ月ハ月ばかりとと
春の夫雄此もう山ばかりて　月と雪霜花ハ冬ばかり

去者ハ月ニ疎シ　馬文人

うの華此里ハ夏と成ハ　ひとり来てひとり咲る
麻柯の根ハ冬ハ　蓮葉此ハ夏といふく
刺鯖の孫ハ冬ハ　抹香の佛ときらく

今を盛る鴨川北　東をさして河とかりぬ

年賀　一夜菴ニ住ス宗鑑ノ跡ナリ　而苦坊

（元名八陣風ト標号シ讃岐ノ）

むかし新宮の里に遊ける　我ならむ新の橋し嶮なむ
思ひ出るに松をかなしみて　ちを山こゆる新舟ちる

（作者八重平ノ元名八文鑑）

雅舟遊覧ニアリ八第八発生家ノ　梅長有
能所ナル故ニトク

北堂月のけしき伊勢の八景とりてあるむし実の
新綱りの接おとたくるに煙こもれおとたる毛
松ノ毛穂とる荷毛ちんと大坂川のに幸に沿の

東寺北東ノ寺ノ塔ノ上ノ鐘ノ和音ノ
新舟ノ書家ノ三ノ月ノ月ノ
と行ノ荷ノ芋ノ月ノ月ノ
とあらに入て拍子木し法師ノ長歌
の文清ノ人し歌ノ月ノ月ノ
清て新舟の船ノ月ノ月ノ
書ノ風し法ノ月ノ月ノ
新綱ノ月ノ月ノ
加の信服し衣ノ月ノ

遊女法花

節の一句とあらはの

伊東知

いとう家の肌さむく　まるくまるくなる
錦ぬきとられて　枝ばかりとなる
ぬぎ捨てられし　紙帳の秋しるれば
ぬぎ捨てられし　いかまくらのあるむ
毛もまるまるの　ふくろ

恨別 竹詩八尾城作ニ又今ノ各ヲ出セリト搔餅記ニ其評アリ　佐麦士

水辺の尾ぬけ河　風の名さし祇おりて
枯るとも長き色　梅ばかりと言はまて

呵猫 首尾吟　岸倚彦

今朝婦く　加ともきて　よめらひと思ひ
あるを祇　枯はるあけくれ
蒐ふく　雀あるとあ
なし　祝ひく　嫁とある
今朝婦く　加ともて

雨月愛鶴牛

豆風曲

かくは　雨のなかりしろく
国をなり　赤とかるし　穀のうち
蒐ふあて　祝ひく　穀の
ほれ祇　ちあるとも　豆名匠

野馬賛

春の野馬はかすかにしも　春花山
尾上の雲のたゆたひ　高尾
月にいなゝく声あり　高尾
雲に珠洲の牧あれば　高尾

寄園南窓

園南の人の独ゝあれば　高尾
風のきゝ知る長あり　高尾
ゆふ秋の花ゝ言あり　高尾
そゝもかくゝ思ひとれば　高尾

越の巴ゝゝ蘇の路のとなりに
かの山中に訪ひ侘るかなしさ
訪ひ来ぬ人の思ひ　蓮二房
ものあつまるみの道
蘇を来ぬ人の思ひ　蓮二房
宮ゝ越の波や侘ゝ　蓮二房
蓮二仰の蘇地　得巴亭
訪ひ和て
松ゝ侘ゝきみの袋　蓮二房
むかしの蘇を立ぬ　蓮二房
世居の酒ゝ月ゝ侘ゝ　蓮二房

○歌類　雑題

寿老人ノ賛　正親町公通

はくしれいよしかきあるは我
命なかきてわのひく命く

むかし紙の鐘ノ図ニ讃　宗鑑法師
ことさらの外より便より少備
ひとつあつらへく
なるあはれ連てもなきこはら僑
いつれかゆきのはなてあり命き

題不知　秋之坊（此坊ハ芭蕉翁ノ秋名ヲ得テ北越ニ名高キ道心者）

焼すてゝ庭の花にもてて雨し
あやまちけりてらとさるゝも

白髪吟　並序　芭蕉翁

なき文月の玉やて武陵に古郷をつきわけなきも
の身はもあきれや小竹に蓬草中にまとわれみえし
たるのみこえなるもしるなみもむしてみえかてはかる
の髪さへして清水あかき衾あらそひてえ

[illegible]

一家[illegible]

[illegible]

○評ニ云此吟ハ遺稿ノ後語ニ題類ノ評論アリ其ハ論ノ略文ニ故翁青ヲ官ヲ辞シ玉ヒ故郷ヲ隔ル万七余年ニシテ或ハ此懐旧アリ去ル天和ノ始トヲ其ハ後伊賀ノ西林寺ニテ例ノ文稿ヲ改ルトテ今思フニ白髪ノ魂祭ハ其月ノ感情ハ演文レト発句ハ第ル次ニ非ラス此故ニ多ク子シムテ歩行様ヲ敢容セレニ當手ノ詞モ慥ナラス増テ切子ノ人所ナレ

[illegible]ヤ有(アル)様躰ト云テ[illegible]ト下句ヲ云ヒ次キテ他諸ノ歌モ然キヤト云ル二實モ前書ノ咏嘆ヨリ墓冬ノ哀傷ヲ評セハ玉屑ニ云ル玉惜ノ悲シミ有テ吟ノ字ヲ題センハト渓家ニ杜陵カ子ニ假リテ白髪吟ト題セレヨリ誠ニ題類ノ太切ナル此等ノ註釈ニ知レトモ但シ此論古文後集ニ黄堅氏カ蘭学ノ沙汰ヨリ然レハ今ノ歌類ニ詞曲吟讃ノ類アルハ渓家ニ文選ニ隨ヒ本朝ニ文粋ニ效ヒテ詩歌ハ本ヨリ一根ナル故ニ此等ノ題ヲ交タル之後人例ノ考レ

扇歌　孟序　東花坊

[illegible]

まれい家のんあらんもけ鈴のひろはせとてしてはれ
の法はさらへあらめ紙のそちのさきみて名れ

たもしや家を人のわらたはてそ名と恨
さらあれさもけ家めあれるいれ

たもしや家を人の国うくあ名と歩う
つしいるむけ家のありさきろれ

たもしや家を人のるれるのてはをしきを
さかりさんけ家めそるいれ

たもしや家を脚はのるはりてみる人は
ちさりるむけ家のやあるろれ

たもしや家を事はひろうてはるよ
しあるるとけ家のるりさへいれ

たもしや家るをるのは袖るんあわ種はて
されくたもうてそやけ家るは

もとはおてはるはあるひとてろ。

○評ニ云ハ歌ハ全ク篇六章ニシテ毎章ニ七句宛ナルヲ率ヤ
ハ羽ニト拍子ヲ換テ結文ハ和歌ノ語路ト成セル俗ニハ公義歌ノ
格トヤ云ン然ニハ歌ノ韻法ハ和歌ニ求韻ノ古制表ナキヲ例ニ
我家ノ新格ヲ加ヘテ前ノ五章ハ起語モ結語モ五韻一協ノ
躰ナカラ後ノ一章ニ韻ヲ換メルハ。又ノ舌音ニ前ヲ整テ
結文ハ弓クスツノ韻ト成セル侵ニ秋風辞ノ如キ六韻一叶ノ

騒論モ此等ノ文賢ト案スレ音韻ハ暫ク古法ヲ守ルノミ
總テ推量ノ沙汰ハ後人ハ例ノ郭案セヨ初一首ノ註スル
所ハ其一ハ扇ニ寄セテ逢字ノ縁語ヨリ班女ガ恨タル古語ヲ
假リ其二ハ故郷ノ扇ヲ見テ法顕ノ歎キレ故友ヲ合スル其ハ之
ハ便面ノ詩歌ニ残リテ人ノ記念ノ帛敢ナキヲ云ヘル其四ハ源
氏ノ生別ヨリモ今ノ死別ノ悲ミヲ云フ其五ハ韋廣ノ詞ニ敵テ
世ノ定ナキ有様ヲ云ヘル其六ハ貫之ノ歌ヲ摘テ此世ノ永キ別
ヲ云ヘルニ招魂ノ二字ハ追慕ノ親切ニシテ一篇ノ骨節ト知
ヘキナリ但シ此扇ハ越ノ伯兎ニ傳ヘテ百栗庄ノ家珍ナリト所々
ニ傳写ノ違モ有ヘシ

辞世ノ詞　　宇治通圓

一服一銭一期ノ中
最期一念雲脚ノ
りをとめりてくらるれ
ゆきそれやれいけるあきれ

佛ニ奉ル菓ノ歌　　苗字陀

花冊をなのもとてそ　絶らかるれの芸うと
ちくとと折らもとて　まちくあ女ぬ女もとて
蔭ゝ中むけのえをを　ちくい袂の花ゆけ
菓をむりもなあ　けそをけそなる

[illegible]

○評云此歌ハ樂府ノ古躰ヨリ十句ニシテ五韻ヲ用ユ去ハ隔對ノ法ナカラ論セハ大和ノ新制ト云ハン去レハ一篇ノ称スル所ハ其人師尚白居人ノ生前ニ新詩ヲ愛セシヨリ今ハ西行ノ櫻ニ勝リテ廟前ニ此花ヲ奉リケルトカ作者ノ姓氏ハ墨跡ニ出タリ

挽歌 並序

渡白拄

我皇ありきる人のよ此時ゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
て蔦此風も吹あくれ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

○評云此歌モ樂府躰十句ヲ前ノ三句八七五ニ韻ヲ踏ミ後ノ句ハ七々ニ韻ヲ踏ムモ和歌ノ韻法ニシテ總テハ八句四韻ナリ本ヨリ樂府ノ常法ニ發語ヲ句外ト成セルヨリ和歌ノ末韻モ五文字ハ言捨ナリ然ハ此等ノ歌ヲ以テ和漢通用ヲ称スベキナリ

比丘尼曲

此曲ハ例ノ新制表ニテ此等 山岸昨襄

むらゝへ廉此ゝみの此世ゝ[illegible]

あるかのごとくちるもの　庭もせの紅葉ちるとや
清流のやるもなかれいやさき　服部の名所ひとつとも
岸のうへの雲も峰　夕日の影のうつりゆく
いとゝあつ雲も秋めかれてや　あるかなきかの風ぞ吹く
世と秋風の同じくて　よるの月ぞ長き夜
方々に月見は哀れ　同じ月見は遊びなれ
扨も神との樹とあれども　腰の紙枚とぞ言ふ

七夕歌和讃　之肯　百阿師

冥の祈りひもあるみれば世とかりたる

の言葉をうつしてあらうまとかりくて
ちくらふ姫とぞ　ちくらふ姫とぞ名つけける
冥の神やうたもやうたにおもてこれた
言葉をうつしてあらうつりきてあられ
きたりの姫ぞ名つけける
冥もあはのきくて一言の秋は
神もむくなかるめるさしきて　秋乃
あさうの姫ぞ名つけける

○評云礼讃ハ序山ノ遠法師ニ始リテ太奉ノ善観房ノ節ヲ附シ我朝ノ声明ト成セリ其意ハ仏ヲ讃歎ノ和歌ニ唄唄ノ類ナリトフ然ハ此讃ノ趣ハ人間ノ色香ヲ

星霜寄セテ人ニ無常ヲ示スハ應現婦女ノ仏説ニ菩薩
ニ天部ノ形号ト知レル誠ニ俳諧ノ琴ニ云ヘル談笑ノ説法モ他文
ニテ遊宴ノ中ノ良手ヲ知レトナリ而阿ノ名ハ剃髪文ニ出タリ

讀法華経　秋之坊

その時とてもちりもなかりけり
ちりとあるこそ捨られぬれ

故人庵茶歌　蓮二房

唐のやうにもたれ申に一千百篇の名字なる
まよれ先生なかく辛し角門風動竹疑是故人

来るこそ捨てかりなき欲なる達の拵へ
かくつれなくもたれ申のあるこそ茶肴のもれ
いとなきなかし庵の面北側ことさらしてたの
酸のこそこそ茶ふきとこそひとりあること
名へ法世のかれ空のあるこそ塵を奪こそ北竹を
拙のこそまよれる程長の鶯語こそ玉川の
物寄の焼炉茶と入れこそ仏説の友達と
ものきこそあら茶こそ石のそこそ沸れこそ
へ遊のかんせれこそ肩きなのかこそ沸こそ茶人のこ
茶枕まへこそ中こそ亦人の枕詞あれ

うくかつの泡と見るくともさも●白花のひらりよ
香へとみられ二●碗を碗をはらりて七碗まかの
清風とともて清風ろこわり来らやらんまへ合よ
うるさくきえてもやの川の穴まてきくれる雲ちりて去了積
の風もこうにかゝりし秋て深ふ毛廉の音ゆあと
吹かくる萩の風もかの高きの竹ゆ吹清くへ竹も
よ代の木そあれあれそや●蓬莱のよろ川世ゆまれ什
さそしして清くさらもりしと
○註ニ曰●飲中八仙詩ニ李白一斗詩百篇ト云々○行事ノ奇ト立テ不丸
いふそのら見骨よかあるまつとしやハ今かかり来も

●蘭省廬山ノ對ハ前ニ出タリ●李白カ襄陽歌ニ鸕鷀杓
鸚鵡盃一日須ク傾ク三百盃●盧仝カ茶歌ニ摘鮮焙芳
旋封裹ト云〻玉川トハ盧仝カ標号ナリ△十論芭蕉翁ノ
遺訓ニあら茶ニ石所ふてねもしやし俳諧のこゝろとまた知
らしト云〻△清くしか竹ニ小松帝の池さらありせさ物のふ
そして清かまあ木のけ物りまよけられハそ候り△茶人ニ茶
枝事トハ茶人歌人ト詞ヲ對シテ定規ノ古風ヲ笑ヘルナリ〻等
ヲ俳諧ノ意地ト知ヘシ△うくかつハ挫詞ナリ歌ニハ泡ノ訓ヲ
假テ多ハ哀レト誦メリ万葉ニ歌方ト書タレト轉深ナト書ヘ
キニヤ撰スルニ〻二句ハ只茶ノ泡ヲ立テト云ハ例ノ俗言モ通レ
難キヲうくかつの挫ニ雅語ト成セル〻等ヲ撰骨ノ絶妙ト
称スヘシ●茶歌ニ白花浮光凝碗面トハ其泡ノ白キヲ称

客ヲ玉川モ茶湯婦ト見タリ二碗ハ下七碗ニハ其歌ノ
取意ナリ●同歌ニ唯覚西脹習々清風生ズ云ヘリ○貫之歌ニ
桜ちるあめのしたをかぜふきてそらにぞ花のなごりなりける
歌ノ通ヲ上ハ式子内親王ノ歌ノ載入ナリ○新古今ニ西行ノ
ちり山ぢ入ル廉のあと吹なびく萩のもとの風○孫子載ル子代
ねはさくあのもとのもとに結つれ行とや云ん名なるらん
●茶歌結文ニ蓬莱山在ル何ノ處ニカ玉川子乗ル此清風ニ歟云ヘリ
帰去来ト云ヘリ結語ハ凡ノ字ヨリ一篇ノ新續ヲ見ルキナリ
○陳云此ノ詩ヲ始ヨリ掃ヘテ序全ク茶歌ヲ越ヘテ
い起ル新撰の句拍子ハ古経ノ所ノ詩ノ新製の一格トスル
し新製の一格とスルニハ故人の後ハ来ル
ゝし本ノ盃ヲ以作ル所ノ所ハ例の後勤

（きくやはらの）今ノ高麗の称ヲ和ヲ茶ヲ以ヲ一節の
ことばとおもひ作ル蓬ヲ以ヲ代の祝言ともおもひ
て句孫ヲあまくく和ノ拍子ヲ和漢の
盛ヲ以ヲ也雅ノ所ヲ高ク毛ハ所ノ所ヲ
漢家の拍子ヲ越の福ヲ婦官ヲ丞駅ハ飛燕
のあくをちるよりヲ暇の間ヲ青ヲ園ヲあてい
て六拍ヲ方の友ヲ

練漉歌　野盤子

野ニ棲ム山ニ宿ル野盤子愁テ病ナンソ何ヲ捻フ涙頻ナル
枇杷李雞親唯一日雁燕易ク過ギ已ニ春

可情重茶長爲客自愧傳書遠附人
我聞夜深扶木墮　月暮忘家
子嘗嗟夫灯火幾年傍母　香烟
墓月亡親　君見眼滲烟霞誰可
撩心誇風月未全貪起来好有使與
胥猶可風雲放此身

○評云此歌ハ灯苞詩義取在リテ天和比ノ作ナリト誠ニ一篇ノ
躰ヲ見ルハ趣ハ漢家ノ語脈ナカラ意ハ大和ノ風僕ト云シ然ハ
此類ノ格ヲモ傳ヲ和漢ニ通用ノ鑑ト成サハ此文集ノ操ナラント
例ニ詩義最ノ中ヲ透来テ此一篇ヲ出セルナリ学ハ趣意ノ

差別ヲ考ヘテ黄白ノ紡ヲ恐キナリ練漉ハ但シ多情ノ様ニシテ
旅亭ノ病懷ヲ写セル野盤ハ先師ノ名ナカラ竹窓水捧ノ
意ヨリ起句ニ我名ヲ嗅出セリトノ右ハ本集ノ題詩ナリ按スルニ
此歌ハ呉融カ員山水歌ノ如ク七六ノ句法ヲ用テ三斯ノ發語
ハ例ノ楽府ニ效リ然ルニ古文ノ歌曲ヲ見ルハ五七ノ語路ハ和漢
ノ恒例ニテ或ハ九七ノ長短アリ或ハ五ニノ長短アルト假名ニハ語
路ノ拍子ニ合ハス多ク音訓ノ差別ニシテ和漢ノ学問ノ遠用
ナルハ先師ノ詩序ニ云ルル如ク趣ハ漢語ノ字面ヲ飾ルモ意ハ
和詩ノ風俗ヲ失ヒラス然モ語路ト青韻ノ汐ハ辟言ハ苔鞭
江神ノ智アルモ我朝ノ土地ニ素達スル学ハ有ハ漢家ノ飯焼ノ無
筆ニモ劣リテ語路ノ長短ト音韻ノ叶不叶ハ皆々推量ノ者
ナルハ返スノモ我ノ学者ハ假名ト真名トノ通用ヲ知ナリ

○辭類

聖人式美辭　　沢庵和尚

旦向ヒテ所ノ東ニ天見ハ神ノ
美モ式美物ノ遠柳ノ本緑ニ
百ノ花ハ咲ケレ
色能ハ美
戴ニ
○評云此一章ハ聖人ヲ無夢ニ云ヘル古語ノ四字ヲ題ニシテ
此等躰ニ書置ヲルヲ美ニ辭ノ一字ヲ添テ文操ノ飾トハ

成セリケリ去ハ此文ノ抑ヲ詩セハ或ハ万葉ノ旋頭歌ニモ非
ス或ハ庭訓ノ真名文ニモ非ス此等ヲ大和ノ辭ト名附テ例ニ
文操ノ新製トヤ云ハン誠ニ此和尚ハ世ニ勝レテ其文ニシテ其質
ナル美ニ好事ノ風流ヲ見レハ其世ニ俳諧ヲ勤ル本意ナン

盃辭　并序　　苗字陀

海ノ底の城ありとやも風ヲ伝ヘ聞ケルのうり。富士の
ふもとのりの花ちるとやも栖ヲ学ぶらし栖ヲ学ぶらしとや
岸中ノ茶臼とかいてこと山と読ムらし茶臼ヲ
りのと雪舟雪村のもとも雪舟雪村の歌

ましてきてあるわひとには仏ならずとさけぬ煩悩の
垢をひれやて化生の意をとうつし塵垢の汁て心鏡を
おもふもあるにふれて心境したれ汁はをはらく
心は日なさとさよし月てる窓に茶に粛にかてを
やより脚布のまへを清めて海て揖取の罠（ワナ）に
まよはれぬ狩人の気もしらずれしておぼれ世
をきもへ猫と我食の天なれし精の水はおりしに
ひれりせられたの里にそ向くことかつあてられく
不意の客をまちふすし有為転変はなられなれく
乱の熱湯をたへて如きらんむつもそひそちの花に

諺にいひて宮女はうつり香にふれてこそあま業女は麝臭
の袖に包て床のはしに伝ひて言をたてやうにかりかうに纏ふ
娼女はきらふなれ又はねは郭のやうにひかれ来鞄
のうへは男をひしられて一業一荘の世のさまを我のし
あらはし説るものゝ

其辞

秋のねさめを何うらむ　恋のは気はうすいうすれて
待れも又の秋はなる　人の錦を余所とみるて花
故ると三言をはれるにあれは　柳は浮世をみありきて

[illegible]

○註曰▲摩伽経乾闥婆城註蜃楼之類也云月令註蜃大蛤也○西行云ふ[illegible]富士のきりの[illegible]
り出しもゝ[illegible]△倭語拾遺童謡に[illegible]
とせゝ[illegible]富士のゆきとちらゝ[illegible]
農民のよ[illegible]天下を[illegible]
の雲此塵にゆめて山焼[illegible]
為し其訓の款入り△書経に食為天云●山谷演雅詩
風間湯沸獨無食▲常陸尼八拍双帋に在り○案女カ
東山の歌八古今集に在り接ス二世一對八乞食ト義女ト
衣類に寄セテ四生に哀れの集石ヨリ△中町訓ハ[illegible]
の婦女[illegible]

○[illegible]

○註云此辞を拾物此[illegible]
[illegible]或夜の[illegible]
[illegible]見と移[illegible]
今宵帰て[illegible]飯れ[illegible]七八[illegible]
関をこゆ[illegible]
作者を湖南の[illegible]津[illegible]
他詩の遊敵[illegible]

感蜃落辞　東苍坊

秋分年痛蜃而見楽天之蜃落辞了則髪

裏辞頭葉裏辞樹與鼓誠運和渥之情而
爰與感慨乗耶今將不住吉之和歌共將競
文章之哀與也熟思人之遊世則用好花
鳥之色竹耳樂絲竹之声竹棟其香竹調
其味竹此四者實謂意之馬車矣乍左有
此四者善用了則為樂人竹悪用了則為
苦人竹物皆謂一得一失者矣于然謂人
間之歯物者貴賤武夫賤商人賤有
日々夜々之用而與齟竹口齢竹令樂人
了共與令苦人事爾迚爰過世人者眠花

竹酔月竹盛時亦者不樂其歯裏用亦者
苦此歯不知生則何知死與者孔子賤所
宜給歯之事也乗奈何所哉人之思違而
耳用者為不病日之用心共歯者不思不
裏時之養生爰爾人之嚼老而老曽森之
夕岚為驚一葉之秋則葛之毎葉動初扇
矣荻之上葉麼風徒而物言則笑了童部
竹物喰則慙通給司竹何欲老身之雨者
有見苦乗耳副用副不似于歯乗矣好夫
所謂人者髪容了共伊勢海蛋之不築澤

麼有令意墨染之尼揉共爲歯之技乎者
不真燒而曉之漆霞麼有物凄乎扨社人
之爲意迚飾耳了耶瑳皇止耶歯者誘引
謂伊達之花矣止尤者在共觀物之栄落
了則名麼被瑳摺針之砂而某耶有鏡之
山則沫梅花之油居嗽楊枝之薫而昨日
者貴於夜光之璧今日者賤如夕貝之
核今何之栄落如斯也耶朝顔者花之假
世共不似生而見憂同人乎昔手焦了雉
子之香而不異鬼之嚼煎餅今今也剌入

豆腐之味而爲似蝶之聲牡丹今斯迚離
老之声色也則歯已將爲明暮之樂摩哉
我若無同則隨無而令管絃之中遊心矣
我若無耳則隨無而可書盃之間置身矣
無夫在世而無歯則旦夕有而味之膳共
夕今有八珍之菓共憖令悅老之同而所
宜給心造罪非施餓鬼之誡乎耶我今悔
一歯之過而誨而世之人了則可畏飲食今
不忘酒色今身者所栄若松之緑共心者
黄反老木之葉迚厭入身秋之風而迚鷹

之惑一羽麼徒蘭之培二葉麼彌疾詩一
歩之價而不撫千兩之黃金了哉在迹撫
月花之風色而貪魚鳥之風味則從詩歌
連歌可賤見了共聖帝之詞今麼人者以
食爲天與乎兼好法師麼徒玉巵有此飯
思意味數則哉書置流石之竹帛皇矣於
然人之忘歩也則可厭者謂忘而歟耶
誠爲忘天人也乎

○詩云此題八白氏文集ニ出テ樂天カ老裏歎ヒヲ灯花詩最
ニ感ノ一字ヲ加ヘテ大和真名ノ辭成セリ去リヤ佛家ノ

經說ニ眼耳鼻舌身意ヲ六根トスク色声香味觸法ヲ
六欲トステ圓通ヲ說テハ其利益ヲ勸メ執着ヲ誡メテハ其
損害ヲ懲ラス六根ハ但シ善惡ノ二相トスシ然ルニ此歩ノ用
タルヤ四支九竅ノ働ニ勝リテ日夜ニ人ヲ利スル所モ物ヲ害
スル事ナシ又ヤ老後ノ手ア色ヲ離レハ六欲ノ中ニ何ソ樂シ去ルヲ
儒書ニモ仏經ニモ此歩ノ徒ヲ称セテハ強テ耳目ニ雖ヲ附テ歩
ニ千金ノ價ヲ爭ハル事ヲ文章ノ意地ト知リ俳諧ノ筆格
ト知キナリ誠ニ篇ノ風流ヲ称セハ老曾ノ段ニ和歌ノ婉曲ヲ
學ヒ摺針ノ段ニハ俳諧ノ談笑ヲ尽シテ中此一篇ノ文綱ナレハ
管絃ト書ト面トニ耳目ヲ讓ル歩ニ後ノ日用ヲ奉ル
前ニハ孔子ノ死生論ヲ合セ後ニハ釈尊ノ餓鬼道ヲ引キテ
儒仏ノ證文ニ文章ヲ固見タル增テ鷹羽ト蘭葉ハ和訓ニ

歯字ノ響音十六本ヨリ六書ノ例ニ效ヒテ和漢ニ假借ノ絶妙ト称スレ然ルニ篇ノ結段ハ例ニ連俳ノ敵詞ヨリ各ニ遍フ書經ノ帝範ヲ引テ天ノ字ニ万人ヲ誡ル誡ニ理論ノ虚実トスイ誡ニ文法ノ死活トスイ和漢ニ假名真名ノ自在ヲ得テ世等ヲ文操ノ本懐トヤスムハン学人ハ文字ノ置所ヨリ句讀ノ長短ニ眼ヲ留ルキナリ

文操巻之二終